大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

異文化の中の自己表現：「沈黙」と「誤解」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 行雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00009960

異文化の中の自己表現
ー「沈黙」と「誤解」ー

佐々木行雄

Ⅰ．日米の自己表現ー「沈黙」と「誤解」（序にかえて）

D．C．バーンランド（1979）は、日本人とアメリカ人の表現構造、コミュニケーションからみた二文化の特性、言語および非言語的自己表現、自己表出の防御などについて実証的調査・分析をおこなったが、その中で最も興味をそそるのは、コミュニケーションからみた日米の特性を「意志疎通の特徴」によって明示したことである。彼は日米の合成プロフィールに基づき、「「改まっている」と「形式ぶらない」、「黙りがち」と「おしゃべり」、「遠慮する」と「くだける」、「つかみどころがない」と「率直な」は、はっきりと文化の特徴を表わしているだけでなく、同じ属性の両極端の構成要素である」と結論づけた。[1] 言い換えれば、日本人はアメリカ人と比較して遠慮深く、自己表現をする際、はるかに改まっており、用心深く、あまり開放的かつ自由闊達には話さない。対照的にアメリカ人は、自己主張が強烈で、はるかに形式ぶらず、くだけており、自分の内面的経験について比較的多くのことを表出する、という。[2]

拙論（1994）は異文化間コミュニケーションにおける日本人の対人関係に係わる重要な三つの要素ー「欲求」、「不安・緊張」、「自己表現」に関してアンケート形式による意識調査・分析をおこなったが、その中で上に引用したD. C. バーンランド(1979)の意識調査を支持するところが多かった。拙論を要約すると以下のようである。[3]

1　D. C. バーンランド（西山千・佐野雅子訳）『日本人の表現構造』新版（サイマル出版会，1979），p. 68．

2　同書，p. 79を参照．

3　佐々木行雄，「日米を視点においた異文化間コミュニケーションにおける対人関係ー欲求、不安、緊張、自己表現についてー」『英米言語文化研究』No. 42（大阪府立大学・英米言語文化研究会，1994）．

1）論理的に自己表現がうまく出来ると思っている人の割合は、僅かに14%（男女)、女子のみに至っては3.4%であった。

2）思っていることをハッキリと論理的にいえる人になりたい、と思っている人は55%(男女)、女子のみでは61%であった。ただし、「論理的に自己主張する人が好きである」人の割合は28.6%(男女)、女子のみでは27.6%と低いのは興味深い。

3）自己表現は話し相手との親しさの度合いによって左右される。相手が親しい友人や家族の者である場合、互いに話をすることが好まれる「欲求」の割合は、外国人に話しかけたり、外国人と交際したりすることを好むそれと、ほぼ同程度（それぞれ54.2%と52.6%）であるが、相手が未知の日本人の場合は、「欲求」の度合いが極端に下がる。

4）自己表現は「不安・緊張」の影響を受ける。たとえば、相手がアジア人の場合と欧米人の場合とでは不安や緊張度に差がある（20%近くの人が差を認めている)。

5）自己表現は人種の違いよりはむしろコミュニケーションとしての手段である言語として、外国語（この場合は英語）を用いるか、母語（日本語）を使用するかによって大いに左右される。すなわち、未知の外国人と英語で話す場合、不安や緊張を感ずる者は51%もあるが、母語（日本語）を使用する場合には17.2%に激減する。

6）日本人は自分の意志に反して相手に「あわせる」傾向が強く、その理由として、「円満・調和」型が約61%にものぼった。

7）自己表現には男女差の影響が認められる。例えば、論理的に自己を表現する能力があることを認める人は、男女で14%、女子のみでは3%である。

以上二つの意識調査から、対アメリカ人を意識した日本人の「自己表現」像が多少明らかになってきたが、本稿では、まず、次の4項目を抽出してみたい。

1）日本人は自己表現が消極的であると自ら認識している。

2）日本人はその消極姿勢を弱点として捉え、改めるべきだと思っている。

3）日本人の自己表現の消極性は、沈黙・寡黙、遠慮などの属性に具現されている。

4）日本人の自己表現は「あいまい」である。それは、「あわせる」、「調和」などに表出されている。

これまで考察した日米の自己表現の特徴をひとことで言い表わせば、両者は極めて対照的である、ということになるが、それでは、そこから日本人とアメリカ人とのコミュニケションの際にどのような誤解が生ずるだろうか。日本人の自己表現形式は、まず、1．言葉で自己表現を（あまり）しない面と、2．言葉で自己表現をする面の二つに分けることができる。1ではそれが沈黙・寡黙などとなって表わされ、2ではそれが「あいまい」などの言語表現となる。さらに、両面とも「遠慮・思いやり」などの属性によって裏打ちされている。これらの行動様式はいずれもアメリカ人のそれとは相対立するものであるから、当然両者の間に何らかの誤解が生ずることが予測される。このことを簡単にまとめると次のようになる。

日本人の表現形式

1．言葉で自己表現を
　（あまり）しない――（遠慮・思いやり等）⇨沈黙・寡黙等⇨誤解
2．言葉で自己表現をする―（遠慮・思いやり等）⇨あいまい等　⇨誤解

ところで、先に取り上げた二つの研究では日米の意志疎通の特徴が調査・分析されたが、そこでは互いの対立的属性の自己表現形式は明らかになったものの、それらが実際の対人関係の相互作用の中で、具体的にどのような状況で生じ、相手にどのように解釈され、どのような誤解を生み、そしてその誤解はどのように解決されるべきかなど、異文化間のコミュニケーションにおけるもう一面の重要問題には、直接的には答えてくれない。そこで本稿では、まず、日本人の表現形式の中の1を取り上げ、異文化間での相互作用の中で「遠慮・思いやり」などから生ずる「沈黙」や「寡黙」という日本人特

有とされる行動様式が人々にどのように認識されているのか、それがどのような誤解へつながるのか、そしてその誤解はどのように対処されるべきか、について新聞や書物のなかに発表された実例をもとに考察してみたい。

II-1．日本人と「沈黙」

日本人がもともと沈黙を美徳と考えて来たことは多くの碩学が説くところである。金田一春彦（1975）は、吉田兼好が、『徒然草』の中で言った「よくわきまえたる道には、必ず口重く、問はぬ限りは言はぬことこそいみじけれ」（七十九段）を引用し、「日本人の言語生活の特色として、まず第一に注意すべきは、話さないこと、書かないことをよしとする精神があるということである」と述べている。[4] 新渡戸稲造（1969）は「沈黙に黄金の価値あり」と題し、「Speech is silvern : Silence is golden. 言語は人に交はるの法、無言は神に親しむの道、国語は国境に限る、沈黙は世界に通ず」[5]と述べて、沈黙を称揚している。日本人の沈黙は個人対個人、あるいは集団対集団の対人関係、つまり、日常生活での人と人との付き合いとか、やりとりの仕方に由来するものであるが、日本人のライフスタイルが、明治以来ずっと急激な西洋化を遂げて来たのに対し、対人関係は基本的にはほとんど変わっていないと言われる。[6] 確かにその通りであろう。先に取りあげた二つの研究調査もそれを裏づけている。しかし、それはあくまで日本という社会の中での日本人対日本人の対人関係のことであり、日本人対アメリカ人、あるいは、アメリカ人対日本人という異文化間におけるそれではない。思うに、この二つの対人関係は基本的には同じだとしても、その「度合い」にはかなりの差があるようだ。例えば、先にあげた拙論（1994）での意識調査では、未知の日

---

4 金田一春彦，『日本人の言語表現』（講談社，1975），p. 15．
5 新渡戸稲造，『新渡戸稲造全集』第一巻（教文館，1969），pp. 287-289．
6 中根千枝，『タテ社会の人間関係』（講談社，1969），pp. 21-22を参照．

本人と話をすることを好む者は全体で15%(女子、約21%) にも達しないのに、外国人との交流を望む者は全体で50%を上回り、女子のみに至っては90%近くに達している。また、すでに述べたように、コミュニケーションの手段として母語を使用する場合と、英語を用いる場合とでは対人関係における「不安・緊張」の度合いに大きな差が認められる。[7] さらに、J. Condon (1979) は異文化間の対人関係では、同類の文化間の場合よりも行動や判断がずっと慎重になり、用心深くなる、と言っている。[8] したがって、日本人間の対人関係の中の沈黙という行為に対する認識が、そのまま異文化間に適用されるとは限らない。

II-2. 米 (英) 人と「沈黙」

Hiroko Nishida & William Gudykunst (1983) はアメリカ人の「沈黙」(silence) に対する考え方を次のように述べている。"Americans try to avoid silence; therefore they fill silence with whatever topic they can find at the moment." さらに、H. F. Van Zandt (1976) を引用して、"Americans often don't know how to cope with silence [the Japanese custom of being silent] . They can't understand what is going on."[9]

イギリス人の P. ミルワード (1978) は、おしゃべりなイギリス国民について、「イギリス人は、子供のときから雄弁と朗読の訓練を受ける。イギリス人はおしゃべりな国民である。それにひきかえ日本人は、われわれが結果から判断するかぎりでは、沈黙の訓練を受けているように見える」とコメントしている。[10]

---

7 佐々木行雄, 前掲書, pp. 78-79を参照.

8 Cf. J. Condon, *Cultural Barriers — Considerations for International-minded* — (Nan'un-do, 1979), p. 20.

9 H. Nishida & W. Gundykunst, *American Communication Patterns* (Kinseido, 1983), p. 27.

10 P. ミルワード, 『イギリス人と日本人』(講談社, 1978), p. 181.

学校の授業で発言しない生徒に対するアメリカ人教師の反応について、J. Condon (1979) は次のように言っている。

> "If our Japanese student friend remains quiet in his classes some of his teachers are likely to assume that he has some trouble understanding what is being said or that he is shy. There might be some who would wonder if he were not interested in the class, since he says nothing."[11]

以上のことから「沈黙」という行動様式についての考え方は、日米（英）ではまさに対照的概念であるので、この点をめぐる双方の「誤解」は十分予測される。

II－3．異文化間における「沈黙」と「誤解」の実例

近年、"global village" に象徴される国際化の中で、多くの人々の異文化間におけるコミュニケーションのあり方に大きな意識変化が見られるようになってきた。この意識変化は最近のマスコミ・雑誌・書物の中に著者や読者の生の声として反映されている。ここでは、日本人特有と言われる「沈黙・寡黙」に焦点を当て、そのような行動様式が、異文化間での接触の中で、日本人あるいは外国人によってどのように認識され、どのように「誤解」され、そしてどのように対処されているのか、まず、資料をあげてみたい。

A．集団間（日本人対外国人）の対人関係に関するもの

その１．朝日新聞（1994•4•6)「声の欄」のフランスに留学中の大学院生は、「聞こえぬ日本側の声」と題し、「これまでフランスのメディアを通して日米関係を見てきたが、常に奇妙な感覚にとらわれる。日本側の声がほとんど

---

11 J. Condon, *op. cit.*, p. 23.

聞こえてこないのだ」と嘆いている。彼によれば、日米の貿易問題に関しても、日本が無条件に米側の要求をのむだけで、日本の論調・諸事情・交換条件などは米国メディア経由であって、米側の声がダイレクトにフランスに届くのとは正反対である。その結果、フランスでは日本に対する警戒と不信の念が増していくのだと言う。

その2．朝日新聞（1992・3・29）「天声人語」には、国連欧州本部に勤務の吉田康彦氏の「国際社会はドライです。だから言論戦で相手を説得しなくてはいけない。それにはシラノ・ド・ベルジュラックふうに、巧言令色、美辞麗句でなくては駄目なんです」という言葉を載せている。

その3．日欧の経済摩擦から生じる「誤解」を検証したE．Wilkinson（1981）は、日本はマイナスの印象を持つ人々を、無知、誤解、偏見だとして片づけないで、自分の国際的役割をきちっと説明すべきだとして、次のように述べている。

> ... Japanese PR has to find ways to explain to increasingly sceptical audiences a number of awkward questions. For example, is Japan pulling her weight in the military alliances linking the parliamentary democracies?... Why does Japan do less for developing countries than so many others? There are many people who would answer these questions by the simple answer—because the Japanese are selfish.[12]

その4．米国在住のボランティア組織代表ケン・ジョセフ氏は、日米貿易摩擦の本当の原因は両国の話し合いの不足だとし、「本当のアメリカ人は、日本の実情を知りません」という。彼によれば、日本の企業は、商品のPRは大変上手だが、国のPRには日本はひどく怠慢で、日本の立場をうまくウ

---

12 E. Wilkinson, *Misunderstanding* (Chuokoron-sha, 1981), pp. 267-268.

イットを交えてしゃべれる人は見当たらない。そのために「日本は冷酷で、感受性に乏しく、高慢である」という印象を与えている、という。そこで彼はその対策として、「日本人の顔をもった、しかも英語のうまい人が必要なのです。政府の人でも、民間の人でも、ユーモアさえあれば結構です」とアドバイスしている。[13]

その5．この意見は実際の体験から書かれたものかどうかはわからないが、日本人の異文化間における「自己表現」に対する読者の考え方をよく表わしていると思う。読売新聞（1994・10・17朝刊）は「気流」に「モノ言わぬ日本人」を特集したが、掲載された主な意見は、「「イエス」「ノー」の言える日本人を作りあげようではないか」、「日本人は自己主張が下手なので損をしていると思う」、「今はモノを言う日本人に転化する時である」、「言うべきことを主張し、聞くべきことには耳を傾けるのが国際化時代の信頼の基盤」、黙っていては分からない。ここ一番では意志を明確に」など、「沈黙」あるいは「寡黙」を奥床しいと評価する投稿はほとんど見られなかった、とデスクは結論づけている。

B．個人間の対人関係に関するもの

Aでは必然的に政治や経済に関するものが主であったが、ここでは個人的な経験を取り上げる。

その1．帰国子女のYさん（女子）はニューヨークでの高校生活の体験を次のように語っている。「そのころ私は「NO」と言えない日本人だった。「NO」と言えないから、こちらの弱さの隙間に相手はどんどんつけ込んでくる。そして結局は自分が損をする。でも「NO」と言ったら、なぜ「NO」なのか、その理由をはっきりさせないとアメリカ人は納得しない。そのへんの説明が言葉の壁に阻まれてできない。・・・これらの“事件”から、「YES」「NO」をはっきり言い、自分の意見を主張できるようにならないと、ますます自分が駄目になってしまうと思った。」[14]

13　K. ジョセフ，「論壇」『朝日新聞』（1987・4・20）

14　山本さゆり，「英語に泣いたハイスクール時代。言葉の壁を破ったのは“君は外国人ではない”のひと言だった」『カルチャー・ギャップ―帰国子女体験リポート』（平形澄子編，マガジンハウス，1990），pp. 36-37．

その2．同じく帰国子女のHさん（女子）は「イギリスの寮生活が教えてくれたポジティブな心と自己主張」という表題の中で、「いろいろなことを教わった。正当な自己主張も共同生活も少しの我慢も、そして言葉も。でも何より身につけたのは最悪なら最悪なりにその機会をどうポジティブに快適に乗り切るかの思考法。そして人間は誰でも違うからこそ、何かその人なりの良いものをみつけてみようという意識だったかもしれない」と述べている。[15]

その3．同じくフランスからの帰国子女で「人と違うことの素晴らしさ」を学んだH君（男子）は、一事が万事、フランスの子供たちの違いに戸惑っていた私だったが、先生方には「どの子も違っていて当たり前」を基本とした教育方針があった。違いがあれば、その場で他の生徒に詳しく説明し、“人は人、私は私”と自分の個性を堂々と主張することの大切さを教え込む。おかげで私は卑屈にならず、のびのびと学校生活を過ごすことができた」と述べている。[16]

その4．岡田光世（1993）はアメリカ現地校で学んでいる日本人小学生の「いじめ」について言及したあと、「・・・片言の英語でも、きちんと自分の意志を伝えると、いじめられなくなったというケースがよくある。アメリカでは黙っていることは、ときには存在しないことと同じなのである」という。[17]

その5．直塚玲子（1980）はアメリカ留学中にパブリック・スピーキングのコースを取った。「婚前交渉の是非について」の討論で賛成派と反対派に分けられ、賛成派に入れられた彼女は「感性的についていけないものを感じ

15　平形澄子，「イギリスの寮生活が教えてくれた、ポジティブな心と自己主張」，前掲書，p. 60．

16　細郷輝久，「人と違うことの素晴らしさを教えてくれたパリの小学校。フランス人の個人主義とプライドは子供の時代から養われ始める」，前掲書，p. 83．

17　岡田光世，『ニューヨーク日本人教育事情』（岩波書店，1993），pp. 65-66を参照．

た」ので、「積極的に支援しないで、ただ黙ってきいていた。」次の週に、数人の級友に会い、笑いながら話しかけた彼女に、「彼らは実にそっけなく、軽蔑のまなざしで対応した。・・・雑談中も私の発言に対する彼らの反応には、侮辱の匂いがぷんぷんと漂っていた。わが生涯で、初めて味わわされた疎外感・屈辱感に私は完全に打ちのめされてしまった」と体験談を語っている。[18]

以上II－3の意見やコメント（左側）を整理してまとめると右側のようになる。

1.「沈黙」・「寡黙」に対する認識

a. 言うべきことを言わない。黙りがち。	自己表現の欠如
b. 自己表現が下手。PRの怠慢。 日本の実情を知らない。	自己表現の方法に欠陥
c. 日本の立場をうまくウイットを交えてしゃべる人がいない。	ウイット・ユーモアのある言語能力の欠如
d. 日本の論調・諸事情がダイレクトに伝わって来ない。	マスメディアの不備
e. YESなのかNOなのか、理由を明確に説明せよ。 自己の役割を決めて、それをきちっと説明せよ。	意思の不明確、説明力・説得力の欠如
f. 自分の個性を堂々と主張せよ。	没個性
g. ポジティブに乗り切れ。	消極的姿勢

18 直塚玲子,『欧米人が沈黙するとき—異文化間のコミュニケーション—』(大修館, 1980), pp. 2-4を参照.

2．上記1から生ずる「誤解」

a．(つけこまれたりして）損をする。

b．日本人に対する警戒と不信の念。

c．日本人は利己的。

d．日本人は冷酷で、感受性に乏しく、高慢。

e．軽蔑・侮辱を受け、疎外感・屈辱感を感ずる。

3．「誤解」に対処する方策。

a．モノを言う日本人に転化する時だ。

b．意思を明確に。相手を説得せよ。

c．ウイットとユーモアをもって、相手を説得できる語学力を身につける。

d．日本人としてのアイデンティティをもち、自分の個性を堂々と主張する能力を養う。

e．あらゆる機会をポジティブに乗り切る姿勢が大切である。

f．幼児の時から自己表現を訓練する教育をほどこす。

以上、日本人の沈黙あるいは寡黙に対する認識とそこから生ずる誤解、さらに、それを解決する方策について、異文化間における体験談を中心に資料を分析・整理した。これら10件の例はほとんど日本人（2名外国人）からのものであり、いずれも（A－5「モノ言わぬ日本人」を除く）海外での生活体験からの実感である。ここで、まず第1に気づく重要な点は、彼らがいずれも日本人の沈黙・寡黙という表現形式に対しネガティブな見解をとっていることである。しかも、上記A－5（「モノ言わぬ日本人」）の意見と極めて類似していることである。第2に、もし、すでに引用した吉田兼好や新渡戸稲造の「沈黙」に対するポジティブな捉え方が従来の日本人一般の考え方を代表するものであったとすれば、近年における人々の「沈黙」に対する意識変化の大きさに驚かざるをえない。第3に、それにもかかわらず、B. C. バーンランド（1979）の日米大学生の意識調査では、全く相反する両極端の結果が出たということは、どう解釈したらよいのだろうか。思うに、それは日本人間の相互作用と異文化間での相互作用とでは、すでに触れたように、質

的に類似していても「度合い」の程度に差があるということであろう。つまり、同国人との交際では、たとえ「沈黙」に対してポジティブあるいはニュートラルな捉え方をしていても、異文化間の相互作用の中ではこれをネガティブに捉えるということであって、両者は区別されるべきである。第4に、今回の資料は、海外経験者のものであるから（A－5 は不明)、「沈黙」に対してネガティブになるのは当然であろう。

最後に、日本人が遠慮や美徳と信じ、たとえ理にかなっていても、がむしゃらに自己主張するのは、はしたない行為だとする考え方は現在でも依然として根強く生き続けている。しかし、それは国内の場合だけであり、近年の国際化の中では少なくとも意識的レベルにおいてはネガティブに捉えられて来ていることは事実であろう。言い換えれば、自己主張をポジティブにとらえ、それを実践していくべきだとする姿勢は、願望をも含めたものであろうが、今後ますます強まって行くことはあっても、その逆はないであろう。それが日本人が世界の中で生き残っていくための重要な要因の一つであることには疑いの余地がないからである。このことは、しかしながら、徒に日本人の表現形式をそのまま欧米のそれに重ね合わすことを意味しない。双方が自己のアイデンティティを保持しつつ、いかに妥協点を探るか、ひいては個人主義と集団主義がいかに共存できるかの道を探ることが、今後の重要課題となるであろう。

なお、「日本人の表現形式」のうちの2（言葉で自己表現をする－遠慮・思いやり等⇨あいまい等⇨誤解）については、稿を改めることにする。また、「言葉で自己表現をする」に関しては、「あいまい」だけでなく、「謙譲」や「恥じらい」など、日本人特有と言われている要素も追加し、枠組みを拡充していかなければならない。